

日本代表 “岡田 JAPAN”

柏瀬光寿（柏瀬眼科）

日本代表としてインド、ダラムサラで最高のパフォーマンスをするべく、2010年12月27日、チーム“岡田 JAPAN”10名がダラムサラに集結した。今回で11回目を迎えたダラムサラでのアイキャンプにおいて、私が担った1つの重要な使命と私が感じた2つの大きな変化があったので、そのことについて報告する。

まず私が担った使命とは、医療機器の寄贈、搬入であった。私の地元である足利のライオンズクラブが50周年、お隣の佐野ライオンズクラブが45周年を迎えて、その記念事業として医療機器を寄贈したいとの申し出を受けた。前年、Zonal病院にYAGレーザーの寄贈を計画するも寸でのところで上手くいかなかった経験があったため、今回の申し出は願ったり叶ったりで、是が非でも成功させたいプロジェクトであった。そのため万全を期して先発隊として本隊より早く、12月23日に水戸黄門（私）と助さん格さん（安嶋さん&木村さん）の3人が、現地に届くはずの印籠（医療機器）を待ちわびつつインドへ乗り込んだ。それらはZonal病院にYAGレーザー、Delek病院にハンディ・オートレフラクトメーターであり、それらを搬入すべく24日ダラムサラに到着し、首をなが〜くして待っていた。しかし、またしても……医療機器は届かなかった。インドと日本との距離は、やはり長かった。ガックリと肩を落とすも、本隊が到着するまでZonal病院のDr.PuriやMedical superintendentとの折衝に時間を費やした。結果として年明けの1月29日、無事に医療機器は現地に到着し、すぐに稼動して現地の人たちに大いに役立っているとの連絡を受け、ホッと胸をなでおろしている。

次に大きな変化であるが、その1つ目が日程である。12月23日に出発し25~29日でアイキャンプ（外来1日半、手術3日）、元旦に帰国というスケジュールから、12月26日出発、28~31日アイキャンプ（外来1日半、手術2日）、年明けの2日に帰る、というスケジュールに変わった。理由は、日本での診療を遣り繰りしながら参加するためには、この日程のほうが参加しやすいだろう、という考えからだった。しかし現地からは「過去10回のアイキャンプの経験から、患者も25日のクリスマスからアイキャンプはスタートすると認識されている。ゆえに日程の変更は混乱を生じるので元の通り戻せないか!？」という提案（クレーム?）を頂いた。彼らの言い分も分かるが、我々も仕事を休んでギリギリで行っているという事情（都合）もある。対応策は今後の課題だが、一方でそこまで我々の活動が現地で認識されているということは、自惚れだといわれてもとても嬉しいことだった。

第2の変化、それは私にとって衝撃を与えた。それは面子が変わったという、たったそえだけの事だった。過去10年間、歳を取っても変わらずいつもそこに居たメンバーがそこに居ない、ということを経験して初めて痛感し、そして戸惑ったことだ。このダラムサラ隊には、いつも冷静沈着な籠谷隊長を筆頭に、岡田先生、鉄人ナース川邨さん、インド&チベット人のアイドル安嶋さん、偽日本人（偽チベット人?）小川くん、事務局長の古寺さんと私の7名に、新しいメンバーが加わるという構成が常であった。ところが今回は、ここから

籠谷先生、川邨さん、小川くんの主力 3 名が抜けた。当初はそれ程、深くは考えていなかったが、アイキャンプが始まると 3 名の偉大さを痛感することに成った。それは固定させたメンバーゆえに阿吽の呼吸でアイキャンプは進んでいたということだった。お互いがお互いを認め、それぞれが夫々の仕事を黙々とこなしていた。今回も、いつものつもりでスタートしたのだが、途中から何かが違う！ でもそれは何故？ 原因が分からず、苛立ちとなって表れてしまった。手術が始まって 2 時間後くらいだったころ、はっと気付いた。「あ！面子が違うんだ！！」結果、として、他のメンバーに不快な思いをさせてしまい迷惑を掛けてしまった。申し訳ございませんでした。しかし時間と熱い志を抱いたチーム岡田 JAPAN のメンバーは、このマイナスを払拭してくれた。インドに育てられインドにお礼奉公を続け、そして今回初めてインド式ウォシュレットを経験した新隊長『岡田先生』、年々凄まじい勢いで手術の腕を上げている『浅野先生』、手術という与えられた使命を最後まで全うし、健康のためなら死んでもいいという座右の銘を語る『藤川先生』、インド人とチベット人のみならず我々日本人の脳裏にも強烈な印象を焼きつけ、インドでホップ・ステップ・ジャンプし、ひと皮もふた皮も剥けた『山名先生』、ナースとしての数多くの経験と世界を駆け巡った行動力を備え、若いメンバーを支えてくださった『木村さん』、ほぼ日本語のみでインド人とチベット人と会話し、オペ室に気持ちいい雰囲気魔法を掛けてくれた『沼田さん』、術者の意識と手を止めることなく的確な眼内レンズ情報を提供するだけでなく、その語学力と名演技で 12 月 31 日の大晦日の電車内で酔っ払いインド人を追い払ってくれた『田宮さん』、年齢不詳の若さで岡田 JAPAN を陰に日向に支えて切り盛りをしてくださった『古寺大臣』、インド人やチベット人からその存在をいつも気にされ、たまに（？）外れる笛の音を通して心の交流を続ける『安嶋さん』と私を含めた 10 名が、日本代表として胸に日の丸を掲げて、熱い想いでアイキャンプを行ってきた。

今回のアイキャンプを終えた今日この頃、いろいろな想いが去来している。2000 年、波百流の声掛けにより始まったインド・ダラムサラでの活動は、1st ステージ（1つの役目）を終了して 2nd ステージに入ったなあと感じた。そこには参加メンバーの変化という面も含めたが、アイキャンプの目的である「現地の自立」を目指すこのプロジェクトも、カウンターパートナーであるチベット人が抱える政治的・民族的諸問題ゆえに、この目標を達成させることは不可能であるということは自明の理である。しかし我々も未来永劫、このアイキャンプを続けて彼らをサポートすることは出来ない。では、どうしたら良いのか？ 答えは分からないが、一歩ずつ見えない答えに向かって前へ進んで行くしかない、否、私は行きたい。熱い想いが続く限り。今回も素敵な経験を有難うございました。合掌< Tashi-Delek >

追記)ダラムサラでのアイキャンプについて、現地在住 20 数年の中原一博氏のブログ(2011 年 1 月 1 日)に掲載されました。「チベット NOW@ルンタ」と検索するか、下記のアドレスをご覧ください。

<http://blog.livedoor.jp/rftibet/archives/2011-01.html?p=2#20110101>

